

2019年3月17日

博士学位請求論文要旨

論文題名 アリストテレス『デ・アニマ』における固有感覚論
——感覚の生起における作用の受動の問題——

提出者 太田稔（中央大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程6年）

論文の要旨

① 論文の主題、当該研究分野における位置づけ

本論文の目的は、アリストテレス『デ・アニマ』における感覚論にかんして1970年代から続いている論争を検討することを通じて、アリストテレス『デ・アニマ』における固有感覚論（五感の感覚）における問題に答えることである。その問題は、長く続いている論争のなかで生じてきたものであるから、この論争について簡単に紹介しなければならない。この論争は、1973年にSorabji, R.が提示したアリストテレスの感覚論解釈に対して、1992年の論文でBurnyeat, M. F. が反論したことをきっかけに大規模に展開することになった。バーニエットの主張は、アリストテレスの感覚論を現代の生理学的な感覚論に引き付けて解釈すること（ならびに機能主義的に解釈すること）への批判である。具体的に言えば、アリストテレスは感覚の生起において、文字通りの身体的変化を要請しているとソラブジが主張したことに対する反論となっている。バーニエットは、アリストテレスが感覚論において主張しているのは、現代のわれわれが考えるような、生理学的な作用の受動に基づく説明ではないと解釈し、アリストテレスの感覚論のみならず、その心の哲学は現代のわれわれには理解しえないものであり、それゆえ、アリストテレスの感覚論は現代にはもはやなじまないものであるという強烈な主張をした。

こうした主張に対して、名指しで批判を受けた Nussbaum, M. だけでなく、多くの論者が、アリストテレスが心身の相互関係を論じているというテキスト箇所をあげることで様々な批判を行ってきた。しかしそれと同時に、バーニエットを擁護するような解釈も多く生まれた。こうした状況の中で、2000年以降この論争は、『デ・アニマ』第二巻第五章における可能態現実態と感覚の関係についてのテキストに議論の場を移し、バーニエットの主張に対する賛否が繰り広げられることになり、その中で、ソラブジ、バーニエットの両立場を止揚するような解釈が生まれている。この第三極は、アリストテレスの感覚論が、『デ・アニマ』第二巻第五章におけるような、特殊な、通常の変化とは異なるような感覚の側面を認めつつも、感覚器官における通常の変化を認めるようなものであり、本論文も、こうした第三の立場を模索するものである。

② 論文の構成

本論文は、第一章において、アリストテレスが『デ・アニマ』においてどのような問題設定をしているのかを正しく把握するために、『デ・アニマ』第一巻の概観を行う。例えば Shields, C. はアリストテレスの感覚論を解釈する際に、アリストテレスがプラトンの二元論と、プレソクラテスの一元的、唯物論的な解釈との間で自説を打ち立てようとしていたと述べている。しかしながら、こうした解釈は——議論をわかりやすく示すためのものであり、シールズ自身の厳密な主張とはなっていないものだとしても——『デ・アニマ』第一巻の主張からすれば、誤った理解であり、プラトンもアリストテレスも、デカルト的な意味での心身問題を持っていたのではない。というのも、古代ギリシャのひとびとは、心身の相互関係についてそもそも問題意識をもっていなかったと考えられるからだ。それでは、アリストテレスの問題意識はどのようなものであったのか、この点を正しく理解することは、その後のアリストテレスの感覚論を理解するために寄与するものである。

第二章においては、先に述べた論争史の概観を行う。具体的に言えば、バーニエットの登場以前のアリストテレス解釈と、バーニエットの登場以後の解釈に分けたうえで、それぞれがどのような問題意識をもってそれぞれの解釈を提示しているのかを示しながら、アリストテレスの感覚論がそもそも持っている根本的な諸問題を取り出すことを目的としている。例えば、アリストテレスは五感のそれぞれを個別的に検討しているけれども、果たしてそれらをまとめた一つの説明というものは可能であるかという、感覚の一体的説明にかんする問題などである。

第三章においては、アリストテレスの感覚論における作用の受動の問題を論じるための予備考察として、アリストテレスの心身論を検討する。周知のようにアリストテレスは、魂を形相・現実態、身体を質料・可能態とする心身論を展開している。しかし、アリストテレスの心身論に対しては、Ackrill が重要な批判を行っている。それは、アリストテレスの質料形相論に基づく心身論は、同テキスト箇所ではアリストテレスが主張している同名異義原理と矛盾するというものである。アリストテレスは、身体を可能態、魂を現実態としながら、同時に魂のない身体を同名異義的なものであり、本来の魂を持った身体とは異なるものとするのである。すると、魂と結合し現実化していない身体（可能態としての身体）は、どこに存在するのだろうか、というのがアクリルの問題提起である。本論文は、浜岡によるアクリル批判を概観しつつ、それとは異なる観点からアリストテレスの『デ・アニマ』における独自の同名異義原理と質料形相論を取り上げることで、『デ・アニマ』における同名異義の主張は、質料の同一性を破壊するものではないと主張する。さらに、質料形相論は観点依存的なものであり、それゆえ柔軟なしかたでの生物の分析を可能にしていることを示す。アリストテレスは、人間の腕は身体全体に対しては質料の役割をしながら、腕を構成するさらに微細な部分に対しては、形相の役割をしているという二重性のもとで腕を含む身体器官を論じているのである。

第四章においては、バーニエットが自説を展開する際の主要な根拠となっているテキス

ト箇所を解釈を行う。それは、『デ・アニマ』第二巻第五章であり、そこでアリストテレスは感覚を、通常の物体同士の相互作用とは明確に異なるものとして位置づけようとしているのである。バーニェットへの初期の批判は、この点についての追求が甘かったのに対して、2000年に入ってからは、このテキストの集中的な解釈が行われてきている。その中で、当該テキストは、確かに感覚における変化を特殊な変化としているけれども、それは感覚における作用の受動という通常の生理学的なプロセスを除外するものではないというものである。本論文は、最終的にこうした解釈を支持するけれども、それは異なる理由からである。つまり、『デ・アニマ』第二巻第五章というテキストは、その中心部にかんしてはバーニェットの的に読むのが正しく、ここでアリストテレスは、感覚を通常の物體的な変化とは異なるものとして提示しようとしていると読むのが最も自然である。

しかしながら、バーニェットの解釈は誤りである。その理由は大きく二つある。第一に、アリストテレスは『デ・アニマ』第二巻第五章の中心部以外の部分において、一貫して感覚を作用の受動に基づいた変化として論じようとしている。それは中心部のすぐ後のテキストにおいてもみられるものであり、そこでアリストテレスは感覚を感覚対象の感覚への類似化としてまとめ上げている。こうした一貫した主張は、特殊な変化という『デ・アニマ』第二巻第五章中心部における発言のみによって覆されるようなものではない。次に、本論文は、バーニェットの主張の根拠として、『デ・アニマ』第二巻第五章の解釈だけでなく、彼の「光」の解釈に注目する。バーニェットは、アリストテレスが光という視覚の媒体を非物體的で、非運動的なものだと解釈することで、そうしたものが眼という感覚器官に対して通常の物理的な作用をすることはあり得ないと主張しているのである。しかし、光についてのアリストテレスの主張を見れば、彼が言うところの「非物体性」「非運動性」という言葉は、完全な非物体、完全な非運動を表しているのではないと考える。光は、空気という物体の現実態であり、空気という物体性をもつものとして視覚の媒体としての役割を担っている。こうした解釈は、現代の生理学的な作用の受動という考えと本質的に異なるものではなく、地続きなものだといえる。

第五章においては、ここまで本論文がアリストテレスの感覚論の、いわば質料的な側面について研究してきたのに対して、その形相的な側面を検討することで、アリストテレスの感覚論の全貌を「質料的側面・形相的側面」の結合体として明らかにしたい。そこで本論文が検討するのは、ソラブジ・バーニェット論争の出発点となった『デ・アニマ』第二巻第十二章である。そこでアリストテレスは、感覚論の最も一般的な規定として形相受容の原則を提案している。形相受容の原則は、「感覚は感覚対象の形相を質料抜きで受容するものである」というものであり、その形相は「比」として示されるものであり、類似化というそれまでの感覚論の規定によっては論じられないような、形相的側面を表現している。形相受容の解釈問題は、1.質料抜きでという言葉の解釈、2.受容の主体、3.比によってという言葉の解釈という三点の問題を含む。これらの検討を通じて、アリストテレスが形相受容によって、感

覚を通常の機械的な作用の受動によって生じるものとしてだけでなく、生物の「生」の一部として積極的に位置付ける根拠を提示する。比を構成する感覚は、「快」「苦」を生み出すものであり、快苦は動物の行動傾向と一致しているのである。さらに人間においては、感覚における比の受容は、思惟論と直結する。こうした検討を通じて、アリストテレスの感覚論が単にボトムアップ式の、生理学的なものに終始しているのではなく、それには還元されないような説明を感覚論に与えているということを主張する。

③ 論文の独自性

第一に、本論文の独自性は、ソラブリ・バーニェット論争という日本においても大きく論じられている問題を包括的にとらえている点にある。第二に、多くの批判を受けたバーニェットの主張を再評価し、そのうえで適切なバーニェット批判をするために、アリストテレスの光の概念の解釈に紙幅を大きく割いた点にも本論文の独自の視点がある。第三に、感覚において受容されている形相を比として解釈することを一歩進め、比を構成する感覚対象の感覚が、快苦とつながることで動物の行動傾向を構成していることを指摘することで、アリストテレスの感覚論の形相的側面を強調した点が本論文の独自性である。

④ 今後の課題

今後の課題としては、感覚論を一体的に扱うという目標に対して、共通感覚対象の感覚や付随的感覚について触れられなかったことがまず挙げられる。生物の「生」の一部として感覚を捉えるためには、固有感覚以外の感覚がもつ様々な働きへの言及がさらに必要であることは言うまでもない。さらにその際、感覚以後の働きである表象や思惟とのかかわりが明らかにされなければならない。また、ソラブリ・バーニェット論争は、アリストテレスと機能主義的解釈についての問題を含むものであり、アリストテレスは機能主義者であるかという問題設定もまた、アリストテレスの思惟論を深く追及することで答えることができるものである。このような研究を重ねて、感覚という言葉がもつ幅広い働きを見渡した後で再び「感覚」という言葉に戻ってきたときに、『形而上学』に見られるような、感覚をエネルギーとするという記述の再解釈を行う必要があると考える。